

学的管理])は、単純課業によって仕事を再構成し、しかもその厳密な遂行様式を労働者に指図することにより、熟練労働の内容を破壊し、労働者の技術能力を退化させる(第5章「科学的管理の第一次的な諸影響」)。他方、こうした労働の組織化による管理方法と並んで、インダストリアル・エンジニアリングの組織する労働機構に労働者を馴化させようとする管理方法(産業心理学・産業社会学)も存在する。だが、現実の歴史をみても理解されるように、資本主義的生産様式がそれ以外の一切の労働組織と生活様式を不可能にしたときはじめて、この順応・馴化は達成される(第6章「資本主義的生産様式への労働者の馴化」)。

第2部「科学と機械化」では、さらに科学技術革命のもとでの資本による労働の包摂の態様が論じられる。

産業革命期と異なり、19世紀末以来の科学技術革命期には、科学・技術の研究が生産様式そのもののうちに通常機能の一部として組み込まれている(第7章「科学技術革命」)。科学自体を資本へと転化するこの革命は、あたかも労働者自身を一つの用具・機械であるかのように取り扱おうとする企て(動作時間研究としてのサーブリック法から、MTM法、UNOPAR法までの発展)のなかで、管理・統制を徹底化した(第8章「科学技術革命と労働者」)。こうした管理法を可能にする生産の機械化(オートメ化)は、機械自体の発達(数値制御)とともに現われ、労働者の技能資格を低下させ、労働者のもつ統制機能を奪い去り、それを経営技術者のもとにおく(第9章「機械」)。科学技術革命下のこうした管理と機械化の発展は基幹部門に従事する労働者の職業構成を変化させるが、生産・保守・補助労働者に比べて増大した技術職員・事務職員も、その賃金・労働内容からみれば、他の賃金労働者のそれと大差ないものとなってきている(第10章「労働配分にたいする管理と技術との更なる影響」)。

第3部「独占資本」では、19世紀末以降の時期を特徴づける独占資本主義の諸要因が叙述される。

バランとスウィージーの共著『独占資本』は、独占面の資本蓄積を生産物(とりわけ剰余価値)の運動を通じて考察したが、本書はむしろ生産(とりわけ剰余労働)の運動を通じて考察する(第11章「剰余価値と剰余労働」)。その際、この急激な資本蓄積の結果であり、条件でもある構造変化が、企業(第12章「株式会社」)、社会(第13章「普遍的市場」)、国家(第14章「国家の役割」)の各分野で指摘される。

第4部「労働者階級の増大する諸職種」では、独占期に増加した職種が「事務労働者」(第15章)と「サービ

ハリー・ブレイヴァマン

『労働と独占資本』

Harry Braverman, *Labor and Monopoly Capital: The Degradation of Work in the Twentieth Century*, New York and London, Monthly Review Press, 1974, ix+465 pp.

まず最初に本書で著者が強調している点を要約しよう。

5部から成る本書の第1部「労働と管理」は、資本による労働の包摂過程を論じている。

本源的に考察すれば、人間労働の独自性は構想(conception)と実行(execution)の統一にあり、人間労働力の独自性も剰余を生む点ではなく、その知的で合目的な性質にある(第1章「労働と労働力」)。この人間労働力に独自の潜在力を最大限に引きだそうとして資本が労働の構想=調整機能を掌握するにつれ、統制がすべての管理体制の中心概念となる(第2章「管理の起源」)。次いで、労働者に残された実行機能が資本により細分化され、部分労働者に押しつけられる。熟練労働者を駆逐するこの企業内分業の導入に際しては、労働コストの低廉化という特殊資本家の動機(「ババッジ原理」)が働いている(第3章「分業」)。企業内分業ではまだ間接的であった労働統制の問題も、科学的管理では科学の適用により意識的・組織的なものとなる。労働過程からの技能の駆逐、構想と実行の空間的分離、知識の独占による労働過程の統制、等をその原理とするテイラー主義(第4章「科

ス業務と小売業」(第16章)に分けて論じられる。

両職種を通じて明らかなことは、給与水準の相対的・絶対的低下であり、労働内容の退化である。作業研究と科学的管理の適用、労働からの構想機能の剝奪、機械化の推進、熟練労働の絶滅、管理・統制の強化、等は、いまや工場労働だけでなく、事務労働・サービス労働にも例外なくみられる事実である。

第5部「労働者階級」は、労働者階級総体が資本蓄積過程でとる動態を明らかにする。

合衆国勢調査からも明らかなように、現役産業労働者は農業人口を犠牲にして増大を続け、事務・サービス部門に大量に流入してきたが、1940年代以降の急速な資本蓄積過程は、こうしたプロレタリア大衆の絶対的増加とともに、産業予備軍の増大を引き起こした。とくに性別労働力構成比の検討から、市場からの男子労働者の反撥と女子労働者の吸収、さらに前者の停滞的産業予備軍への転化と後者の停滞的・流動的産業予備軍への転化がともに論証される。こうして一方の極における富の蓄積が他方の極に失業を含むプロレタリア大衆の貧困を蓄積する(第17章「労働者階級の構造と産業予備軍」)とき、過程の中間にいて、どちらの特性もあわせ受けている「中間諸層」もまたプロレタリア化への道をたどる(第18章「雇用の『中間諸層』」)。もはや生産・不生産労働の区別が問題ではなく、賃労働者であることが不幸なのである(第19章「生産的労働者と不生産的労働者」)。最後に、労働技能の趨勢に関する謬説(「平均技能資格の高度化」説と「労働者のグレード・アップ」説)については、その論拠とする高技能職種への職業移動と平均教育期間の延長の事実が検討され、前者については、統計操作によって造りあげられた「技能職種」の内実が暴露され、後者については、その事実の経済的効果が労働技能の修得と無関係なことが暴露される(第20章「技能にかんする最終ノート」)。

以上の諸論点を展開した本書の意義は、次の2点に要約されるだろう。

第1は、本書が資本による労働の実質的包摂をその具体的態様にわたって追求していること、つまり一方で相対的剰余価値の搾取機構の発展を、他方でその過程での労働の退化をとともに具体的に論述していることである。「資本主義制度の内部では、……自立の力能としての科学が労働過程に合体されるにつれて労働過程の精神的力能が労働者から疎外される」(『資本論』第1巻、第23章)のであるから、労働過程における統制権の剝奪による労働の退化という本書第1部・第2部のモチーフは、

マルクスが「疎外」の名で呼んだ問題をバベッジ原理、科学的管理、さらに科学技術革命下で発達した管理諸形態という彼の時代には未知であった質的变化を通じて現代に甦らせることであったように思われる。

第2は、資本蓄積下の労働の態様が本書では労働者階級総体の分析によるその窮乏化の論証として行なわれていることである。マルクスの時代に比べ相対的にも絶対的にも増加した事務・サービス職種を背景に、農業→製造業→事務・サービス・小売業という職業移動を伴う急速な資本蓄積過程が一方で富の蓄積を他方で貧困の蓄積を同時に引き起こしてゆくという本書第4部・第5部におけるモチーフは、マルクスの「窮乏化」論を戦後アメリカ資本主義の発展のなかで論証するものである。

疎外と窮乏化の両視点のこうした統一こそ現代アメリカ社会学を中心とする様々の謬説(新労働者階級論、新中間階級論、熟練労働の増加説、等)にたいする本書の批判を成功させたものと考えられる。

だが、本書の限界も指摘されねばならない。問題点は次の2点に要約される。

第1の点は、本書が工場体制をこえた労働諸条件の現実的変動を分析していないことである。これは、著者のとった方法、すなわち対象を生産(労働)の運動に限定し、生産物(価値)の運動は balan とスウィージーの前掲著書をもって代替しようとする方法態度に由来している。こうした価値論の欠除は、とくに本書での職業移動の背景となっているはずの生産力増大とそれが引き起こす物質的労働対非物質的労働の比率変動との無視となって現われている。価値と労働の両視点を統一しないかぎり、マルクスの時代と質的に区別される生産力の構造変化を把握することはできない。

第2に、本書は資本主義的生産の発展自体が成熟させる資本主義止揚の条件を必ずしも十分に解明してはいない。その場合、なによりも大工業のもとでの労働の社会化と労働者の階級的団結に注目すべきであり、とくに科学技術革命のもとでの労働組織の意義(技術的必然としての普遍的労働の成立・肉体労働と精神労働の対立の止揚)と、マルクスが評価した労働組合の意義(工場体制の内外における労働者間競争の止揚)が確認されるべきである。こうした物質的条件を欠落させ、ただ「産業の運営能力」への展望を教育にのみ求める(p. 445)のは——もちろん必要なことではあるにしろ——スミスと同様「同種療法的投薬」となる危険性を内包している。

疎外と窮乏化の両視点を統一し、さらに上述の限界を克服することによって、マルクスのプラン「賃労働」論

の基本的骨格を整え、世界市場で発現する恐慌に際し労働者階級が総体として選択すべき戦略の検討に立ち向うことは、目下の急務である。そのために本書が生かされるならば、今は亡き著者もそれを本望とされることであろう。

〔渡辺雅男〕

